小説 綾守竜樹
挿絵 しなのゆら

立ち読み版

序章 008
第一章 卵の割れた夏 013
第二章 幼虫は秋でものたうって 076
第三章 蛹のごとき冬 164
第四章 忍蝶の舞う春に 217
終章 249

登場人物紹介

Characters

鈴木 蓉子（すずき ようこ）

鎮守府審神機構一等官（略称サナイチ）。人間と妖怪のあいだで生じた揉め事を取りなす。場合によっては、特殊な能力も使う。

忍（しのぶ）

伊奈澤家に住む座敷童の少女。

伊奈澤 聡美（いなざわ さとみ）

伊奈澤家の令嬢。先代当主の娘にして現当主の姪だが、使用人暮らし。メイド服をまとって忍にかしずいている。

菱井 春兵衛（ひしい しゅんべえ）

学生風の洋装をした、ぬらりひょん族の青年。

伊奈澤 源二郎（いなざわ げんじろう）

伊奈澤家の現当主。病死した先代当主、浩太郎の弟。忍を屋敷内に祭る、Ｉ県有数の資産家。

ここだけで、尋常の運動会が開ける広さだろう。庭はすべて芝生に覆われ、夕陽を吸って柔らかく輝いている。複雑な堀と置き石のされた池が三つ、渓谷と言ってもいい枯山水が一つ。池の向こうには、不思議な骨組みをしている東屋と唐風の鐘楼が見える。その裏手には、山の斜面をそのまま植えかえたような雑木林が広がっている。山の精が退屈しないよう、人造の森林をこしらえたらしい。

――私どもは我が家の掟で、忍様に絶対服従を誓っている。

その言葉が、がぜん真実味を帯びてきた。

「お目付殿、忍様がお会いになられるそうだ」

源二郎はそう告げると、大廊下を戻りだした――なぜ同行しないのだろう？　私の不思議そうな目つきに気づいて、きまり悪げに右手を掲げる。顔のまえで拝むような仕草をさせたそれには、醜い火傷の痕があった。

「いまのところ、私は忍様の不興を買ってしまっている。忍様は姪の聡美と来客以外、この離れに立ちいることを許しておられぬのだ」

「……聡美さん……先代のお嬢さんですね？」

「そうだ。姪と忍様は、一種の……昔馴染みでな。姪は忍様の侍女を務めているが、これは我が家の掟に従っているだけだし、何より、姪自身が望んでいることなのだ」

庭の何カ所かに設けられていた添水が、足なみそろえて鳴った。風呂か台所か、どこか

で薪を燃やし始めたらしく、モノが焦げるときのいがらっぽい匂いが流れてくる。
「……どうぞお入りください」
障子の陰から、若い女が呼びかけてきた。

※

凛としているが、温かみを失っていない。
類希なる美声だった。少しも押しつけがましさのない口調は、発言者の強い自制心と、その裏表を為す脆さとをうかがわせた。また、秘めた情熱の響きも感じられた——源頼朝のまえで、「よし野山／みねの白雪……」と歌舞した静御前を連想させられた。
「……失礼します」
私は障子を開けて、灯入れされている部屋に入った。香油を燃やしているらしく、透明感のある匂いに抱きかかえられた。
座敷童用の離れは、和洋折衷の数寄屋造りらしい。六畳ほどの応接間は、洋風にこしらえられていた。板敷きのうえに革張りのソファと年輪切りの木卓が置かれ、ソファの隣に女性が立っていた。
「すぐ忍さまが見えられます。おかけになって、お待ちくださいませ」
メイド服らしき衣装に身を包んだ女——伊奈澤聡美は、私と目を合わせるよりも早くお

辞儀してきた。私も彼女の顔を見るより先に、突きだしているものに目を惹きつけられてしまい、気づいたときには頭頂部だった。

栗毛の頭が深々と沈められるのに合わせて、背に乗せられていた髪が流れおちる。コシの強そうなストレートで、せせらぎめいた音が聞こえてきた。髪の先が床に届く寸前、聡美は上体を起こした。突きだしているものも、上下に揺れた。

「……あ、はい。では、遠慮なく……」

私は示されたソファに座り、聡美の顔を見やった。

一目千金。

思わず、運転手の言葉に同意していた。

聡美のそれは姫君、それも武家の姫君を思わせる美貌だった。肌は白く、陶磁器の硬さを匂わせる。眉は細みで、やや吊りあがっている。目も多少吊り気味、涼しげな切れ長だ。健康的なプライドを感じさせる高さの鼻、やや血色の悪い唇。

顔の造りそのものは、薙刀を振りまわすのが似合いそうなくらい鋭いのだけれど、その瞳——黒曜石のようなそれが、すべてを和らげている。控えめに輝く双眸は、まだ二〇代前半であるにもかかわらず、哀しみを見つめてきた者だけが持ちうる深みをたたえていた。

「……あの、なにかございましたか？」

慌てて視線を逸らし、首からしたのありさまを見やって、

「……」

頭のなかで、運転手の絶賛がリフレインする。

聡美の背は高い。九頭身はありそうな小顔と手足の長さのせいで、よけい長身に見える。コンチネンタル＝タイの巻かれた首はほっそりとしており、わずかに見える腕にも、あからさまになぞれる足にも、余分な贅肉はまったくなかった。厚めの前掛（エプロン）を巻いていながら、腰まわりは私と大差なさそうだ。にもかかわらず、

「……あ！　……あ、あの……この服は、わたしの趣味ではないのです……」

その胸と腰。

どちらも重量級の膨らみだ。上のそれは鎖骨のすぐしたあたりから迫りだし、下のも長い腿に乗っているだけあって、恐ろしく位置が高い。大きな肉塊にありがちなだらしなさは微塵もなく、小気味よい緊張感のある曲線になっている。

殊に半ば剥きだしの胸は、あの運転手が詩人であったことを裏付けてくれそうだった。ぶるるんぶるるんの、たっぷんたっぷん――華奢な胸板のうえに、何ともまろやかそうな塊がこんもりと乗せられている。奇蹟である。谷間は秘密を挟んでいるように深く、その暗がりでエロスが発酵していそうだ。

ほかの部位では西洋彫刻じみた黄金律が厳守されているだけに、甚だしく悪目立ちしていた。女性の象徴にして母性の証、豊かであるほど望ましいもののはずなのだが――同性

の私でさえ、ふしだらな形容詞を召喚したくなった。
「……これは……この服は、その……わたしではなくて……いえ、その、これを着るのは、わたしの意志なのですけれど……」
たぶん、衣装も戦犯なのだろう。先ほどから、メイド服らしきと推定をつけたり、腕が隠されて足が見える、とあべこべを言ったり、何より「胸が剥きだされている」と当時の貞操観念では考えられない説明を連発しているが――。
聡美は、あまりにもいかがわしい服を着ていた。
基本的には、当時のカフェーで流行していた英国風家事使用人服だ。白帽（キャップ）、濃紺の洋衣（ドレス）、飾縁のついたエプロン。ただし、いかがわしい改造つきの、である。
まず、胸元が開きすぎている。乳房の頂きに達するかどうか、といったところまで襟刳りが下ろされているのである。それだと聡美の超弩級を保持していられないらしく、バツ印の吊り帯（バンド）で補強されていた――最初から隠しておけばいいのだから、本末転倒もいいところである。しかも、帯の縛り首じみたありさまを隠すために襟布（スカーフ）を巻き、青いタイで止めていた。無防備なのか装飾過剰なのか、なんともちぐはぐだ。
スカートとエプロンの丈も、胴の底が見えそうな短さである。いまで言えば超マイクロ＝ミニ、すらりと伸びた太腿からある俗説を思わせる足首まで、完全に叩き売りだった。帝都の女学生がこのような格好をしたら、それだけで退学にさせられるだろう。ドレスと

同じ濃紺のストッキングも、足を隠すというよりは細く、白く美飾させる効果しか持たず、そのうえ縁を肉に食いこませて太腿のむっちり感を暴露してしまっている。

「……あの、意志と言っても、望みとはちが……いえ、ちがわないのですけど……」

私の視線に気づいたらしく、聡美は赤くなっていた頬を、さらに紅葉させた。耳まで染めあげて、髪の生え際に汗を滲ませる。

おかしい。

私には、聡美の内なる声がわかる――彼女はまちがいなく、人一倍羞恥心の強い女性である。女学校あがりという経歴からしても、自分がいかにふしだらな姿をしているのか、痛烈に自覚しているはずだ。それが何故、このような娼婦まがいの格好をして、しかもわけのわからない弁明を続けているのか。

「……ふむ、いやなのか？」

襖の陰から、笑い混じりの問いが投げかけられてきた。

少年の快活さと童女の甘えが綱引きしているような、聡美とは異種の美声だった。聞いているうちに、自然と微笑まされてしまうタイプだ。まわりに老人がいたら、歓声を引きだしたくておこづかいを渡しまくるだろう。

松の画が横滑りして、この離れの主人が姿を見せた。
「答えるがよい、聡美……その格好で客人と会うのは、いやなのじゃな？」
人間の外見でいけば、一二歳くらいの少女だろう。身振り手振りが、ちょうど愛くるしさの盛りである。顔は名工の作った市松人形のように端整で、小粋に乱したおかっぱは葡萄、吊り目に浮かぶ瞳は深緑だった。森を思わせる瞳には少年じみた快活さがあり、それが彼女をして人形美の枠をはみ出させていた。
「……いえ、忍さま。いやではありません」
聡美は否定し、和装の少女に向かって頭を垂れた。押しころしたものを感じさせる声と態度だった。
伊奈澤家の座敷童――忍はフンと鼻を鳴らし、聡美を一瞥した。蝶型の髪留めを撫でると、何も聞かなかったかのように、私の対面に座った。
「失礼した、お客人……儂が忍じゃ。ここでワラシサマなんぞをやっておる」
すっと右手を袖に引っこめ、袂から扇を取りだす。私から視線を外さずに、真っ赤なそれを振った。聡美が弾かれたように動きだし、お茶の用意を始めた。
「お初にお目にかかります、忍様。鎮守府審神機構一等官、鈴木蓉子と申します」
「……般若心経みたいな肩書きじゃな、蓉子でよかろ？　蓉子、キレイな名じゃ……して、サトリ族じゃと？」

「はい……わが一族の天職として、お目付役を拝命しております」
「鎮守府入りしとるのじゃから、それなりの甲羅は経ているのじゃな……じゃが、儂の中身は聞かせぬぞ？」
　聡美が優しげな手つきで、紅茶とチョコレートを供してくる。忍に差しだすときには、砂糖とミルクまで入れてやっていた。忍は聡美のほうをまったく見ず、当然のように受けとって一口飲んだ。
「……ぬるい」
「も、申し訳ありません！」
「これでは、お客人も満足できぬ」
「……いえ、私はべつにかまいませんが」
　私が手を伸ばすより先に、聡美が忍と私のカップを回収していた。
「す、すぐにいれなおして参ります」
「あの、私はまったく気にしてはおりませ……」
「早くせい！　儂は、客人と茶飲み話するのが何よりの楽しみなのじゃ……客人は、儂に外の世界を教えてくれるのじゃからな」
「……ッ！　は、はい、いますぐお持ちいたします……」
　聡美は嫌な顔一つ浮かべず、それどころか、まるで傷ましいものを見せられたような表

情さえ浮かべて、台所に引きさがった。

「……」

私は、忍をじっと観察した。

さりげなくいいものを着せられている。着物は桐壷織（きりつぼお）りの青黛地（せいたい）に、銀糸の刺繍。柄は蝶と花、一着あげるのに一年かかる本仕込みモノだ。帯も同織の赤で、炎様入（ほむらさまい）り。銀細工の髪飾りは、富山の前田工房製である。この一そろえだけで、帝都に家が買える。

「すまんな、お客人。儂は最近になって、えげれす帰りの柱（ヤツ）と知りあいになってな。いろいろ教えてもらえるので、あちら趣味に凝っておるのじゃ……聡美は、和モノは上手いんじゃが、洋モノはいまひとつでな。よい葉を買わせているのに死なせてばかりじゃ」

忍は妙に刺々しすぎる口調で言いながら、扇を開いた。真っ赤な地に一輪、カタクリの押し花が咲いていた――素人っぽい細工からして、忍の手作りらしい。

「……お待たせいたしました」

聡美がすぐに戻ってきて、同じように給仕する。忍はやはり聡美を見ず、礼も言わず、黙って受けとり唇を湿らせた。今度は文句をつけず、私にも薦めてきた。

「では、いただきます」

M&Wのキーマン（こうきゅうブランド）OP（オレンジペコー）、グレイドは三つ星を下らないだろう。この一杯だけで、私の一週間分の食費に相当する。

認めざるをえなかった。

源二郎の言うとおり、伊奈澤家は忍を大切にあつかっている。先ほどの聡美の態度が示しているように、忍に臣従している。忍のほうも、贅沢ができる境遇に満足している――サトリといえども同種の心を読むのはコツがいるので、裏は取れていないが――とりあえず、受けいれてはいるようである。私は銘茶だけに許された葉本来の甘みを堪能しつつ、胸のなかで腕組みした。

いったい、何が、どうトラブルになっているのだろう？

忍と伊奈澤家の関係は、まあ薔薇色とは言いかねるようだが、どこのどのような組織だってギスギスを抱えている。審神機構は「愛と平和の使者」でも「大家と店子の仲人」でもない。深刻な利害対立の調停者だ。この程度の係争に、何だって私が出動しなければならなかったのか。

もういい。ここまで避暑に来たと思って、明日になったら帰ろう。そのときの私は、すっかり終わった気になっていた。報告書の書きだしを考えていたほどだ。これから始まる淫宴（うたげ）に対して、何の心構えもできていなかった。

「ああ、そうじゃ。聡美……」

座敷童がカップを置いた。いかにも「いま思いついた」というふうに、

「……おまえも、お客人にあいさつするがよい」

忍の傍らでお代わりの準備をしていた聡美が、全身を凍りつかせた。肩をすくめ、息を飲み、両眼をギュッとつぶる。眼下の忍にすがりつくような視線を降らせたが、忍はあいかわらず私のほうを向いたまま、聡美のそれと結ぼうとはしなかった。

「……いやなのか？」

座敷童の声が、少しだけ冷える。

「い、いえ！　わたし……いえ、聡美は、喜んで忍さまの命に従います……」

メイド姿の美女はポットを置くと、私に正対した。頬を真っ赤に染め、肘と膝を小刻みに震わせる。先行きの読めない事態をまえに小首を傾げる私の眼前で、いきなり、自分のスカートを捲りあげてきた。

「……なっ！」

聡美はエプロンも一緒に持ちあげ、真っ白な股間を露出させてきたのである。

「あの……さ、聡美さん……？」

むっちりとした太腿は滑らかな下腹部と繋がり、いかにも物言いたげな切れこみを描いている。股の魅惑的な隙間、足の付け根の陰から尻たぶのまるみが垣間見えている。女性の部分を覆っているのは洋物の下履き、いまでいうショーツだ。

それも彼女の雰囲気からは考えられない、血のような赤である。掌の面積しかないうえ

に、そのほとんどが刺繍飾りだ。早い話、溝以外は丸見えで、年の割には慎ましやかな唇までさらけ出されていた。さらには恥丘のふっくらとした盛りあがりが、あますところなく目視できた――聡美には、恥毛がなかったのだ。股布まわりのかすかな青みからして、毎日剃っているらしい。

「……あの……よ、蓉子さま、その……お気になさらないでください」

聡美は続いて、上衣のバツ字に手をかけた。留め具を外し、ただでさえはち切れそうになっていた胸元を発破した。封じられていた双乳が、肉の弾性を私の瞳になすりつけてくるような勢いで跳びだしてくる。重みを匂わせるように揺れる。尖端部、すなわち乳首と乳暈を隠すように赤いレースが貼りつけられていた。

「……そ、そんな……気にするなと言われましても……」

いまで言うならニプレスに当たるそれも、尻の峡谷に食いこんでいるショーツも、ただ往生際の悪さを印象付けるだけだった。羞恥心に駆られて桃色に染まっている肌との対比が、危険なくらい艶めかしい。

「お、お客さまに……ご、ごあいさつをさせていただきます……」

自分の女体っぷりを自分で明らかにすると、聡美は両手を頭の後ろで組み、しゃがみこんだ。思いきり膝を開き、折りたたまれた太腿の肉圧や足の腱をさらす。芸を見せるイヌのポーズを取ってから、暗記させられたと思しい自己紹介を述べてきた。

「……わ、わたしは、伊奈澤聡美です……聡美は、このように……い、いやらしい女体をしている、淫らな牝犬ですが、忍さまの調教のおかげで……かろうじて人間のふりをし続けています……で、ですが……」

聡美の目の縁が、真っ赤になっている。いまにも涙をこぼしそうに潤んでいる。サトリの私には、聡美の感じている羞恥と屈辱がいやでも伝わってきた。

「……ですが、聡美は、い、いやらしすぎる乳房をぶらさげていますから……すぐに、み、淫らな欲望に負けてしまいます……そのときは、お客さまに、あ、あさましいおねだりをしてしまうかもしれません」

そのようなことしたくない——聡美の本心は、そう言っていた。

「そのさいは……この、あ、あわれな牝犬に……お慈悲をかけていただければ、嬉しいです……聡美は必ず……か、必ず」聡美は奥歯をギリギリと噛みしめ、後ろ髪をクシャクシャと掻きまわして、「必ず……イキます」

「さ、ささ聡美さん！」

「牝犬の義務ですから、絶対にイキます……そして、い、いやらしいことをしてくださったお客さまへの御礼として、い、い……『イク』とご報告させていただきます……いま、お客さまに……サンプルをお、お聞かせいたします」ゴクリと唾を飲んで、「さ……さと……聡美ぃ……」

「……お……お待たせ……しました」
遅れて到着したメイドの姿を見やり、私はまたもや固まった。
聡美は、鎖でできた服を着ていた。大きめの金輪を編んだ西洋防具――鎖帷子（ホバーク）と鎖股引（ショース）を思いきり裁断し、局部専用と化したものを身につけていた。あなた方の語彙でいけば、水着のビキニがいちばん近いだろう。
あとは、いつものタイだけ。隠してある部分より隠してない部分を探すほうが、はるかに早い。なけなしの覆いは生意気すぎる双娘や無毛の恥部たちに食いこみ、肉質感を滲みだせている。防護というより監禁しているようにしか見えない。
「聡美の……いやらしい女体を……お役に立ててもらえたら……嬉しいです……」
しかも銀色の輝きぶりや着用者の疲弊ぐあいからいって、相当に重そうだった。腐っても防具、錨を背負って歩いているのと同じなのだろう。運動能力の高くない聡美には、ここまでくるだけでも一仕事だったようだ。
「うん、みんな悦ぶと思うよ……まず、そのいやらしい胸から食べさせてあげようね」
聡美がちらりと忍を見やると、無表情の頷きが返された。忠実すぎるメイドは瞼を閉じ、

春兵衛の敷いた布団に俯せた。石橋のえぐれた部分に胸を乗せて、それ以上は落ちこまぬように両手を突っぱらせる。凹みを占拠した双乳が、本来の重みプラス鎖ビキニのそれであられもなく垂れ、水中に没した。

「……つ、冷たい……あ、くっ……う……うう……」

見ているぶんにはマヌケだが、当人にしてみれば一種の背筋トレーニングである。両手で支えていても、やはりツラいらしい。真上からの日差しもあって、聡美はあっという間に玉の汗を浮かべた。

「……これは、いったい……池の魚に餌を与えるのではないのですか？」

「そうだよ。いま、最高のご馳走を沈めてあげたのさ」

私があることに思いあたったのと池の水面が荒れだしたのとは、ほぼ同時だった。あちこちでバシャバシャ、と飛沫があがった。数えきれぬほどの水紋が、橋のなかほど――餌場の浅瀬――聡美の双乳めがけて押しよせてきた。

そのなかの一匹が跳ねて、姿を見せた。

「……ひ、ヒルコ魚！」

私の叫びと被さるように、聡美の呼吸が止まった。腕立てのポーズに曲げられた肘が固まり、邪魔者のように伸ばされていた足が、ピンと引きつった。

「……ッ！　……ッ……っく……う……ッ……！」

重たげに沈められていた女の房に、この世ならざる妖魚が集っている。魚もどきたちは防御の役に立たない鎖を潜りぬけて、ラズベリーの果粒を一つずつむしるように啄んでいる。水飛沫が舞い、バシャバシャという水音が聞こえてくる。

「菱井春兵衛っ！　ヒルコ魚は鎮守府御禁制の幽造妖怪です！　府一等官として……」

「認可状なら、このとおり」

「……外つ国の走狗と化して、楽しいですか」

「そう言われても、これが僕の本業だからさ……あっちは一神教の重圧が厳しすぎて、こういうクスリが不可欠なんだよね。ま、一種の人助けだと思ってるよ」

穴だらけの会話である。あなた方には、意味不明だと思うが、詳しく語れないのだ。一言だけ言えば、あなた方にとってのパチンコ利権と同型の問題である。

「それにさ。聡美さんは彼らの熱い噛みつきのおかげで、肉芸者になれたんだよ？　……聡美さんって、とっても貞操観念が強くて、恥ずかしがり屋でさ、正攻法で責めたときは、ちっとも乱れてくれなかったんだ。ヒルコの催淫液がなきゃ、ムリだったろうねえ」

「た、ただの人間女性に、太祖の媚毒を盛ったと……」

「たっぷりと、ね……忍ちゃんも、もちろん、ご本人も了解してるよ？」

「……」

ヒルコ魚は、クラゲに近い組成分をした幽造妖怪である。あなた方の身近なものでたと

えれば、大きさを含めてエリンギというキノコに似ているだろう。あれを無色透明のゼリー状物質にして、その頂き部分にラッパ状の「口」をつけたと思って欲しい。

すり鉢状の粘膜部である「口」は、クラゲの傘よろしく蠢いて対象をくわえこみ、総入れ歯を抜かれた老人のようにむしゃぶる。彼らの食料は対象の思念で、対象の分秘する液体に溶かしこまれたそれを漉しとるのである。

したがって、ヒルコ魚は対象から体液を――何らかの昂奮に駆られて思わず滲みだしてしまったようなそれを、できるだけ流させようとする。そのために吸引、摩擦、揉捏などの刺激行動に出るのだ。私は職務上、彼らに指先をしゃぶられた経験があるけれど、それだけでうなじを鳥肌立たせられた。そのときのヌルヌル感を思いださせられるため、しばらく刺身類を食べられなかった。

「あああ、胸……胸にぃ、来る……ああ、くる、きちゃう……ッ！」

本題はここからだ――。ヒルコ魚は口の奥に小さな棘を生やしている。本当に小さいものなので、刺されても猫の舌に舐められているようなものだが、その根本にはクラゲのように嚢胞が設えられているのだ。

カエルの卵じみたそれには、幽現どちらの女性にとっても強力な催淫効果をもたらす薬物が貯められているのである。サトリ族と同様に冷徹で知られ、「魂を氷柱で覆う」と言われている雪女族でさえ、この媚毒には溶かされる。処女の雪女（ぜったいれいじょ）でさえ蕩かせる媚薬は、

このヒルコ毒だけだ。

ヒルコ魚は、元々蛭子神（ひるこのかみ）の説話を踏まえて生みだされた式神的妖怪である。われらの太祖なる父母は、一種の不妊に悩まされていたのだが、それは「睦合（まぐわい）いのさいに母から声をかけていた」からだった。そこで太祖たちは、女側からは声をかけられないようにする方法――それも悦んでそうするものを求めた。

だが、女に沈黙を求めるのはムリである。となれば逆療法的に、会話にならない声だけを出させてやればいい。すなわち、いつも喘ぎや嬌声を噴きあげさせていればよい――。

「あああ、ああっ！　……また、し、痺れる……胸……聡美の……あーっ！」

ヒルコ魚は、すぐに性的な娯楽用に転ぜられた。暗い狂熱に基づいた品種改良が重ねられたあげく、一種の肉体改良具と呼べそうなものになったのだ。媚毒により女性の性感を飛躍させ、さらにはその昂ぶりでもって気脈、すなわち神経を異常発育させるのである。ヒルコ魚に噛み続けられた場所は、性感帯に変えられてしまうのだ。

「あーっ、あーっ！　あああーっ！」

絶世の美女が、双乳だけを池に沈めている。クラゲのような妖怪たちがそれに群がり、ヌルヌルの甘噛みをくり返し続けている。美女は火のついたように絶叫して、首を左右に振りたくっている。

「よーし、オッパイぜーんぶ噛まれたみたいだね……クリトリスなみに敏感になっている

でしょ？　たっぷりと生汗を染みださせてあげてね」

春兵衛は聡美の隣に跪くと、鎖ビキニのバックを引っぱった。元から窮屈にしていた膨らみが、上辺だけの鎧に食いこまれて乳肉をはみ出させた。

「……あっ、イクッ！」

その刺激が引き金になった。これまで徹底的に開発され、いま再び媚毒で満たされ、そして人外の唇戯をけしかけられている双乳は、絶頂の発信基地になったのだ。聡美は一気に匂う汗を噴きださせて、ビクビクと痙攣し続けた。

「だめぇ！　ち、乳首だめっ！　乳首ぃ、しゃぶられ、えひいっ、噛み……？」

ヌルヌルのしゃぶりつきとザラザラの甘噛みが、双乳を包んでいる。特に乳頭は、押すな押すなの奪いあいになっている。どこかを舐られるだけで、聡美は心臓をのたうたせていた。二つの突起を噛まれると、もう視界を白ませていた。

「か、噛むのだめぇっ！　そんなっ、しゃぶりながら噛み……ック！　くあ、あああ！　な、何匹いるのぉ？　……ック！　……まだあ？　ああっ、まだ乳首されるのぉっ？」

「いやなら、いいよ。忍ちゃんに聞いてみたら？」

「……ック……うああ……ああっ、イク！　むねっ、乳首ぃ、イクゥッ！」

上半身に力が入らなくなったらしい。聡美は腕立てふせの姿勢を崩して、石橋に突っ伏した。首をあげ続けられず、そのまま落としかける――目の前は水面である。人間は洗面

器の水でも溺れ死ねる。
「……おっと！　はは、いつも保たないねえ。毎日イヌ歩きさせられているんでしょ？　もう少し腕の筋肉がついていてもよさそうだけどなあ」
私が駆けよるよりも先に、春兵衛が手を伸ばした。聡美の栗毛をつかみ、あたかもウマの手綱でもあつかっているみたいに引っぱりあげる。ある意味で「哺乳中」のメイドは、女の命で吊りあげられて命拾いしていた。暴力的なあつかいのせいで髪の生え際が剥きだしになり、頭皮の脂汗がよく見えた。
「あああ、もういいでしょう？　胸っ、また狂っちゃう！　おかしくなっちゃう！」
「……聡美さん、とっくの昔におかしくなってるでしょ？」
春兵衛は小さく口笛を吹いて、ヒルコ魚たちを鎮まらせた。髪の毛を引っぱって聡美の上半身を起こさせる。水揚げされた双乳は、二まわり近く膨れていた。鎖の食いこみで肉が割れているさまは、ほとんどブドウの房だった。一つの塊に見えなかった。
「こんなふうに……さっ！」
春兵衛が背後から手を回して、鎖ごと双乳を揉みあげる。金輪どうしが擦れてジャラジャラ鳴ったはずだが、私の耳には聞こえなかった。
「……うあああああああっ！」
いまの聡美の双乳は、一種の貯薬タンクだ。女神すら狂わす媚薬で満たされているうえ

に、内部の配管まで腐食させられている。一気に燃えあがって、華々しく爆ぜる――。
「イクッ！　イクイクイクゥッ！」
「……ふふっ、本当かなあ？　ただオッパイを揉まれているだけでしょ？」
春兵衛が、双乳の性感を知りつくした者の手つきで揉み続ける。副乳のあたりに親指を沈ませ、掌ぜんたいでは乳腺を包みこむように押しあげる。と同時に、小指を下乳の付け根に食いこませ、人指し指と薬指で乳暈を挟み、中指の腹で乳首を転がす。とにかく粘っこい。手それじたいが一つの生き物、女の乳房を貪る肉食動物のようだ。
「あああっ、本当っ！　本当ですう！　さっ、聡美は……ック！　……聡美はっ、本当にぃ、む、胸でっ、か、感じてしま……ック！」
「感じてるだけなら、べつに困りはしないで……」
「い、イッてますっ！　胸でぇっ、む、胸がぁ、いッ……イッてます狂ってますおかしくなっちゃってるイクゥッ！」
聡美は背後の凌辱者に上半身を預けて、あられもなく喚きちらす。かすかな腹筋が肉の狂乱を訴えるように浮きだし、両手の指が聞こえない狂想曲を弾いている。
「ただ揉まれているだけでも狂っちゃうんだ、本当にいやらしいオッパイだねえ……特にどこがいやらしいのかな？」
「ち、乳首っ！　さ、聡美の乳首はっ、痴女の乳首でぇ……」

春兵衛は餌場の水たまりに手を突っこみ、ヒルコ魚を二匹つかみだした。まるで子供に靴下を履かせるように、二人の「痴女」に被せた。

「……あああーっ、あああーっ！　きゃあああおーっ！」

なぜ石橋のうえに布団が敷かれたのか、よくわかった。そうでもしなければ、「餌（さとみ）」が全身傷だらけになってしまうからなのだ。女は双乳だけでもこれほど狂えるのか、とバツの悪い感嘆を覚えさせられるくらい、聡美は激しすぎるアクメをくり返した。

「……ックあ……あああ……うあ、あああ……」

絶頂に憑かれた顔は蒼くなっていて、口から垂れている舌の赤さが恐い。涎の筋が鎖骨のくぼみにまで伸び、匂う水たまりを作っている。

「……じゃ、次はおま×こを食べさせてあげようね」

「い、いい加減にしなさいっ！」

私は春兵衛の肩をわしづかんだ。

いくら当人たちで合意しているとはいえ、ヒルコ魚に噛み続けられるのは麻薬を大量に摂取させられているのと同じである。これ以上は、医学的な意味でも危険だ。

「えーと……どうする、忍ちゃん？」

「……聡美」

忍はずっと、両手を握りしめて聡美の狂態を見ていた。

『問題あるまい。蓉子君は、サナイチとして極めて優秀だ……審神官の優秀さとは、いかに私情を殺して杓子定規にふるまえるかによる。今回の場合、そもそも機構側からは手出しできないし、一枚ばかり噛んでいるものもあるからな』

「あいかわらず適切な分析です。さすが百目族の三一番様、よく見抜いていらっしゃいますね……常に保身を考えておられるその慎重な人生設計には、心から感服いたします」

『いやいや、蓉子君の寝技力こそ賞賛に値するよ……春兵衛君が勝手にできるのは、これで最後なのだろう？』

私は答えずに、その隣――ぬらりひょんの菱井春兵衛と視線を合わせた。

「やってくれたね、蓉子さん。三日前に連絡が来たよ……僕は幽界で謹慎だ」

「せっかくお知りあいになれたのに、とても残念です」

「……くそ、いつかその慇懃無礼を剥いでやる。徹底的に調教して、僕のペニスなしではいられない牝にしてやる……」

「ご武運をお祈りします」

「……鎮守府における蓉子さんを過小評価してた僕のミス、か。まさか御巫家ルートで牽制するなんて、反則技使ってくるとはね……だからさ」

春兵衛は帝大風マントを脱ぎ、背後に放りなげた。床の敷布――紫色の弾力マットらしい何かがニュッと伸び、腕のような粘体で受けとめた。

「これで最後だし、僕も禁じ手を使わせてもらうことにしたよ……僕のいちばんの調教仲間、エンジ君さ。今夜は彼にも参加してもらう」

全員が座っているマットの真ん中、料理の並べられている地に、目鼻口らしき凹凸が現れる。一畳分はありそうな笑顔が、まるで波間を漂っているように揺れる。

「ぬ……ぬっぺっぽう族の御方ですか……」

――神祖、駿河にゐませし御時、或日の朝、御庭に、形は小児の如くにて、肉人ともいふべく、手はありながら、指はなく、指なき手をもて、上をさして立たるものあり。

『一宵話』の紹介で知られるこの妖しは、わかりやすく言えば「和製スライム」である。固まる直前のコンニャクめいたその粘体は、質量保存の法則にしか拘束されず、自由自在に伸び縮みして、いかなる姿にも変形する。

「……こら蓉子、なにしとるのじゃ？　客人がすべきは、女主人に対する酌であろー？」

忍と聡美は、七柱（実際には六柱）の円陣から少し離れた上座にいた。

忍は紫色のイス――エンジ君の一部――に腰かけ、聡美はその横に控えている。私は三一番や春兵衛とのストロベリー＝トークを中断して、忍のそばに近寄った。座敷童らしからぬその姿を、まじまじと見つめた。

「むう、これか？　ふふふ……儂もよくはわからんのじゃが、えげれすの女主人はこのような格好で人を迎えるそうじゃ。なかなかに強そうで、格好良かろ？」

「確かに、ホステスもドミナも和訳すれば『女主人』ですが……」
忍は、いわゆる女王様ルック――革製のビザール服を着ていた。腿にまで達する超ロングブーツ、ほとんど「U」の字と化しているショーツ、コルセット一体型のブラジャー、肩口を呑みかけている長手袋（アームロング）。チョーカーも含めて、すべて黒である。
布地の荒々しいカッティングもあいまって、透明感のある雪肌が引きたてられている。起伏の乏しい身体ゆえに扇情的な感じはしないが、まちがっているという感じ、インモラルな雰囲気はビンビン伝わってくる。
「……なんじゃ、ちがうのか？　まーた春兵衛に一杯食わされたかの……ま、そこそこ気に入っとるからかまわんのじゃが」
まえにも言ったが、われわれ幽種の多くは裸を見られることに抵抗がない。しかも、ここに集っているのは聡美を除いて妖怪ばかりである。忍のように無邪気な柱は、本人の美意識に抵触しなければどのような格好でもするだろう。
私は何とも言いかねる表情のまま、忍が突きだしてきたグラスに琥珀色の酒を注いでやった。グレンリベディック二四年、英国シングルモルトの最高級品である。忍はぐっとあおり、半分ほど減らしてから「ぷはーっ！」とウイスキー特有のバニラ臭を吐いた。けらけら笑いながら、聡美に向かって手を出す。チョコレートを肴に、残りを流しこむ。
「忍さま……少し……ペースを落とされて……ください……」

聡美は、例の改造メイド服だった。スカートの裾はマイクロ＝ミニで、胸元は超デコルテで、背は靴ヒモの編みあげ式で、手足は薄布でピッチリとカバーして、頭と首とあちこちに白いフリルがひらめいていた。さらに野外とあって、濃紺のハイヒールを履いていた。ときおり見え隠れするショーツは、あいかわらず血の色だ。

「……今日は……ッ……の、飲みすぎ……あッ……で、ですよ……」

忍の世話や宴の給仕役として働いているとはいえ、不自然に汗みずくである。秘密の赤をさらすくらい腰をくねらせ、尻をわななかせている――すでに進行中なのだろう。

「なんじゃと……自分の身体にはー、何をされても文句言わぬのに……儂がちょっと酔うただけでー、口出ししてくるのかー？」

先ほどの飲みっぷりからして、相当飛ばしていたらしい。忍は妙に座った目つきで立ちあがり、フラついて聡美に支えられ、それをはねのけるようにして歩きだした。明らかに危ない足取りだった。手にした九条鞭（ナインテールキャッツ）をビチビチ振りながら、車座に分けいる。リング＝アナウンサーの趣でポーズを極める。

「……皆の衆！　これより本日のめいん＝でぃっしゅを供すぞー！」

エリスと黒太郎が歓声をあげ、氷雨は黙ってぐい飲みを傾けた。三一番が無数の目玉をギョロギョロと動かし、春兵衛は忍を補佐するように近寄った。

「聡美！　皆にあいさつして、例の芸を見せるがよい。そして……そして……」

「……そして、皆様から承認をしてもらいましょう」と、春兵衛。「主人以外の第三者にも奴隷として共有されたとき、聡美さんは牝犬を卒業して新たな身分に昇格します」
「そうじゃ！　聡美は新たな身分に……春兵衛、何じゃったっけ？」
「マゾ」
「それじゃそれ！　うむ、聡美はマゾになるのじゃ！」
忍は無意味に鞭を振りおろして、エンジ君を叩いた。
「今日はそのお披露目式でもあるのじゃ……早くマゾ牝に生まれかわるがよい！」
「……」
聡美はギュッと両眼をつぶった。両手を握りしめて震えを殺した。長い睫毛をゆっくりと舞わせてから、忍の隣に歩みよった。
エプロンとスカートをたくしあげ、胴底の紅葉をさらす――今日のショーツは、二枚の木の葉を糸で結んでいるような代物だった。股関節のラインから恥丘の艶まで露わにしていた。続いて胸元を発破する。顔を出したのは、ニプレスでなくブラジャーだった――表面積で換算すれば、二匹のチョウと大差なかったが。
自分の女をさらけ出してから、頭の後ろで腕を組む。ハイヒールにより自然と爪先立ちを強いられているせいで、踵から腰にかけての筋肉が凛と張りつめていた。隠し味のおかげで女性らしいまるみが強調され、脚線美が匂ってくるようだった。

一息ついて腰を落とし、ほぼ一八〇度に開脚する。筋力はないが、柔軟性は高いのだ。ここでもハイヒールが効果を発揮して膝を押しあげ、M字の角度を険しくした。ふくらはぎや太腿の肉質感がじわりと滲みだし、ショーツの食いこみがエグさを増す。

「……わたしは、伊奈澤聡美です。聡美は、このようにいやらしい女体を……」

ちょうど聡美の膝頭を突きつけられる方角にいた輪入道が、勢いよく転がって席を変えた。アカナメと雪女のあいだに割って入り、両方から嫌そうな顔をされる。たるみのない尻を向けられている百目は、その場から動かずに瞳の焦点を移動させた。

「……今日はお客さまへの感謝として……あ、アヌス分娩を披露させていただきます」

『うわ、忍っち……ばりエグいことさせよるなァ……』

『この娘の身体に危険はないのだろうな？』

エリスと氷雨が、それぞれらしいコメントを出す。

聡美は両手を解いて、腰の裏に回した。そのまま尻たぶまで下ろし、右の二本指にショーツの背布を引っかけてから左右の肉房をぐっとつかむ。M字開脚のまま、自分の手で尻たぶを掻きわけて肛門をさらした。

『……おサトちゃん、低すぎや。ワシら百目のダンナとちごうて、顔の高さでしか見られへんのやで。そんなんじゃ、おケツの大スペクタクルを目撃でけんわ』

『聡美君……膝を着き、上体を倒して臀部を掲げたらどうだろう？』

黒太郎と三一番に囃したてられて、聡美はくるりと反転し、両膝と両乳を接地点とした四つん這いになった。大臀筋を緩められるようになったらしく、尻の谷間をムリュッと広げて菱形の窪地に変える。ほんの少し色褪せている秘肌の中心では、排泄器と思えぬほどすべらかな蕾が放射状の皺を浮きしずみさせていた。

「め、牝犬の聡美は……お尻から……い、愛し子を産ませていただきますっ！」

聡美が奥歯を噛み、両手に力をこめて尻たぶを歪ませた。粘膜のすぼまりがヌメらかに膨れあがり、内なる赤みを閃かす。皺の隙間からとろりとした腸液があふれ、内臓の臭いを振りまいた。

『……なんなら？　妙に甘ったるいニオイじゃきに』

『これは……本当にこの娘の同意を取っているのだろうな？』

一方は見開かれ、一方は細められている女妖怪たちの目に、透明な尻尾が飛びこんでくる。小ぶりのバナナていどのそれが、皺を裏返しながらムリムリと抜けてくる。

『ほ！　な、なんとまあ、ケツんなかにヒルコを飼わせとったんかい！　……ヤツら、ずっとグネグネ暴れとったろうし、それに……』

『……腸壁をあちこち噛まれ、太祖の媚毒に蝕まれているだろうな。直腸も膣なみの性感帯になったわけだ……これからは用便のたびに、女哭きするだろうな』

一方は昂奮して、一方は科学者のように母体の惨状を物語る。

「う……くはあぁっ！　はあっ、はっ、はっ！　はああっ、ふううっ！」
あちこちから投げかけられる四種の発言によって、聡美は自分が見世物に堕とされていることを痛烈に自覚させられていた。その演目も、要するに大便するのと同じである。さらに救いがたいことに、調教されきった穴はそれだけで気持ちよくなってしまう。太腿を痙攣させられ、我知らず尻を振りたくらされてしまうのである。
『エロじゃ……聡っち、ぶりエロじゃよ！　うったらばったらガマンせんで、ほれ、イッてまえ！　ドーンとイッてまえ！　イキ倒したれ！』
聡美は下腹部に体重を落としこみ、まだ腸液を啜っているヒルコを押しだした。肉襞たちが刮がれて、生っぽく呻く。わが子はビチビチと尻尾を振り、仮初めの胎内に戻ろうと足掻いている。狂った直腸はかすかな揺れでも痺れ、背骨の裏を伝って末梢神経までスパークさせた。膣のそれとはちがって、底無しの酩酊感を撒きちらした。
『……だが、これでは無理ではないのか？』
あと少しで吐きださせるというところまで来て、ヒルコ魚（うお）が腸壁の血管を噛んできた。聡美はひとたまりもなく背筋をのけぞらせて、一瞬だが立ち膝になった。下唇から涎を垂れながしつつ、床に倒れふす。激しい運動のあとには不可欠の弛緩が訪れて、
「……うふあああっ！」
母を恋しがる子供は得たりとばかりに、ぬぶぬぶ潜りなおした。

『あらら、まァたやり直しかいな……しっかしまァ、おサトちゃんいうたらおチチやと思うとったが、とんだ飛車角落ちやったな。このムチムチのケツにわななかれては、こら辛抱たまらんわ。ケツ穴のぬめりっぷりも、よう見えるし……』

ヒルコ魚は無色透明で、聡美のアヌスは柔らかく伸びる――まさに実験教材である。

『肛交はその奥……内臓への遡及を想わせるからな。膣腔を貫かれて「口から飛びでる」と言うのは演出過多だが、肛門であればさもありなんだ』

「ふああっ、だめえっ！　だめっ、もう奥にこないで……噛まないでぇっ！」

聡美は身悶えしながら、永遠の排泄感を味わい続ける。ゆるゆると生き血を抜かれていくような、ものすごく遠回りの被虐に蝕まれる。括約筋を始めとする排便向けの筋肉群が消耗して、麻痺しかけている。

「……おねがいっ、早くっ！　もう出て、許してっ！　だめなのっ、もう……うあっ？」

こめかみが痙攣するほど息んだのに、また噛みつかれて元の木阿弥にされた。いや、失敗して遡られるたびに腸粘膜が挫け、より産みにくくなっていた。それに自分と外界との境をずっと開けさせられているせいで、自意識もあやふやになってくる。

『聡っち、本気汁だらだらじゃ。尻穴いじめられて、漏らし倒しとる……』

『あまり褒められた話ではないが……昂奮させられるな』

『せやけど、真打ちはマ×コやろ？　ワシ、ケツ穴ほじくる変態にはなれへんで』

『黒太郎、あなたは押しも押されもせぬ変態だと思うが……それはともかく、いまので八回目だな。忍君、この芸は、まだ未完成なのではないかな？』

三一番が指摘したように、それはもはや分娩ではなくなっていた。とてもゆっくりとしたピストン運動、薄められたアナル＝セックスになっていたのだ。尻も女になっている聡美は眉根を寄せて、宙に尻文字を書き続ける。ときおり堪えかねたように両足を暴れさせて、ハイヒールの爪先で床を叩く。

「……むう、儂の手助けがいるようじゃな」上級者向けの鞭を掲げて、「主人に恥をかかせ、あまつさえその手を煩わせるとは……お仕置きじゃな」

「あああ、ああ……はい、忍さま……申し訳、ございません……ああっ！　あっ、あっ、あっ！　……さ、聡美を……お仕置きしてください……マゾにしてくださいっ！」

忍が残忍な笑みを浮かべて、ナインテールキャッツを振りおろした。九枚のなめし革がわななく双臀に打ちおろされて、迫力のある打擲音を弾けさせた。

「あーっ！」

雷撃的な痛みをもたらされて、聡美が全身を緊張させる。随意ではとうてい搾りだせない底力で、あらゆる筋肉を引きしめる――腹筋、括約筋、大臀筋が一致団結して、直腸を握りつぶす。舞台のコントで使われそうな、どことなく間の抜けた噴出音をさせながら、妖魚（ビルコ）が飛びだした。行きがけの駄賃とばかりに、かぎ爪よろしく肛門を捲りあげた。

「……ッ！」
アヌスの痛痒感と直腸の解放感が衝突し、腰の裏を痺れさせたあげく、消化器ぜんたいの安堵感に吸収される。焼けるように爽やかで、爽やかにうっとりさせられる生理の満足――聡美はたまらず尻たぶから手を離し、自分で自分の身体を抱きしめた。尻をくねらせながら、わが子に代わって産声を喚きたてた。
「い、イクッ！　聡美ぃ、イクイクイクゥッ！」
叫びおわってからやっと筋反応が追いついたらしく、全身を震わせ始める。
「聡美さん、アナル絶頂のときには、『イク』じゃなくて『でる』……僕と忍ちゃんとで、あんなに躾けてあげたでしょ？　まだ覚えてなかったの？」
「う、は……はっ、は、はっ……うふぁぁっ、あっ……あ、す、すみま……せん……」
一語発するたびに、口から涎が滴りおちる。唾液腺や唇まわりの筋肉が、完全に効かなくなっているらしい。
『……し、忍っち！』エリスが尋常（じょうがっこう）の学童よろしく挙手して、『ウチ、もうガマンの限界じゃけ！　早よ聡っち貸しんさいや！』
忍は、たったワン＝アクションだったのに肩で息をしていた。何かに怯えているような目でアカナメを見、次いで聡美を見た。喉のタイ飾りを、あのカタクリを見つめた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!